

活動テーマ

長瀨町の観光に関する地域住民と来訪者のイメージギャップの可視化による
観光資源活用方策の最適化

長瀨町 ものづくり大学大学院 田尻研究室

1 活動目的

全国的に有名・人気のある観光地は、来訪者による外部評価と地域住民や町内の観光事業者などの観光を受け入れる側の内部評価がある程度一致しており、その相乗効果により、観光地としてより一層の活気が創出されている。つまり、理想的状態からのギャップを定量的に把握することにより、観光資源活用の最適化が図れると考えられる。そこで当研究室では、長瀨町来訪者に加え、長瀨町住民を対象に観光資源の評価・活用に関する調査を実施し、双方のギャップを把握、長瀨町に点在する観光資源の最適な活用方策を模索することで、長瀨町観光の更なる発展を目指す。

2 活動地域の現状

長瀨町は埼玉県の北部に位置し、長瀨渓谷による岩畳や渓谷を利用したライン下り・ラフティング・カヤックなど数々の観光資源を保有しており、また地質学発祥の地として、ジオパークに登録されているなど歴史的に見ても埼玉県にとって重要な要素である。長瀨町の入込来訪者数について、長瀨町産業観光課の調べによると、平成13年の215.4万人を基準として年平均2万人程度来訪者が増加しているが、継続的な来訪者数維持には観光資源の有効活用が今後の課題であると言える。

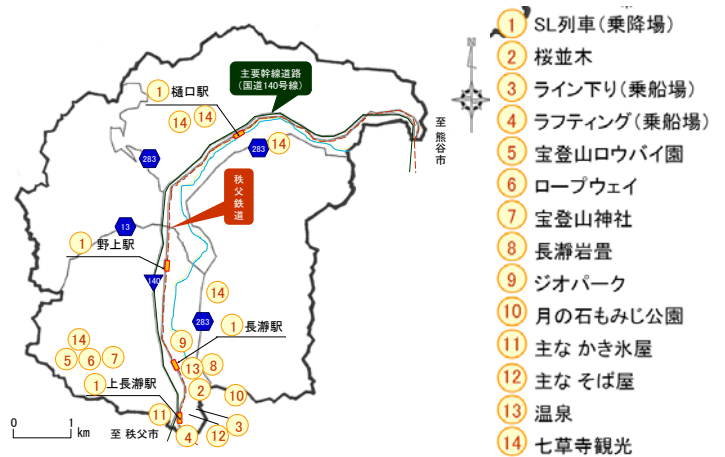


図-1 長瀨町の主要観光資源

3 活動内容

3-1 来訪者意識調査の実施

内部評価と外部評価のギャップを分析するために、2017年度～2018年度に実施した来訪者対象の意識調査を継続して実施することでデータを蓄積、より正確な来訪者の観光資源評価の分析を行なった。今年度では「春」「夏」の各季2日間に渡り調査を実施、季節ごとの来訪者特性の把握を行なった。



図-2 調査風景(春)



図-3 調査風景(夏)



図-4 ヒアリング風景

3-2 4カ年の活動結果の取りまとめ

今年度では、「ふるさと支援隊」としての今までの活動結果を取りまとめ、長瀨町観光の更なる発展に向けたアクションの検討・調整を行った。また、昨年度の課題でもあった、町外からの協力人材の発掘を達成するべく、来訪者調査にワークショップや長瀨町の観光活性に関する活動に協力的な人材の発掘を行なった。

4 成果

4-1 長瀨町住民の考える観光の課題点

長瀨町の各居住地の「観光に関する改善点」を、コレスポネンズ分析を用いたグラフを図-5に示す。主要観光地は、「長瀨町内の回遊性」・「名産品やお土産の購入場所の充実」・「宿泊施設の充実」に改善が必要と感じていることがわかった。中心市街地は、その他の自由意見として、「温泉」・「駐車場や歩道の整備」といった意見が挙げられた。山間地は「長瀨町へのアクセス」や「観光案内のわかりやすさ」等に改善が必要と感じていることがわかった。

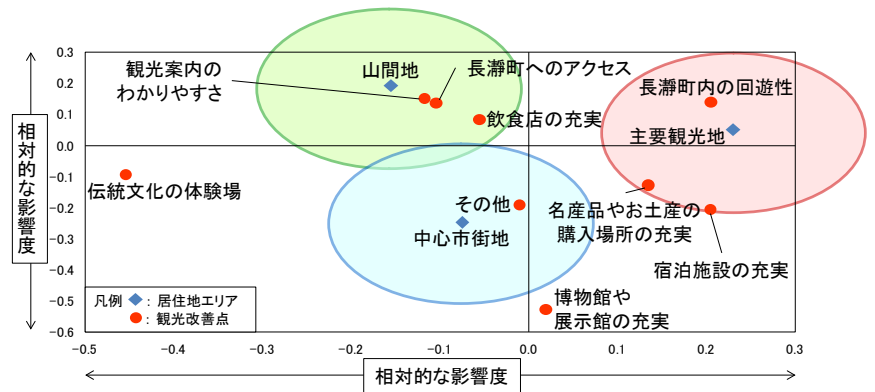


図-5 各居住地の観光に関する改善点

4-2 長瀨町住民のまちなみに関する改善点

長瀨町の各居住地の「まちなみに関する改善点」を、コレスポネンズ分析を用いたグラフを図-6に示す。主要観光地は、「HP・観光PRへの取り組み」・「交通安全や防犯」・「身近なコミュニティ」に不満を感じていることがわかった。また中心市街地は、「歴史あるまちなみ」・「自然環境」に不満を感じていることがわかり、山間地は「バス交通の利便性」・「秩父鉄道の利便性」に不満を感じていることがわかった。

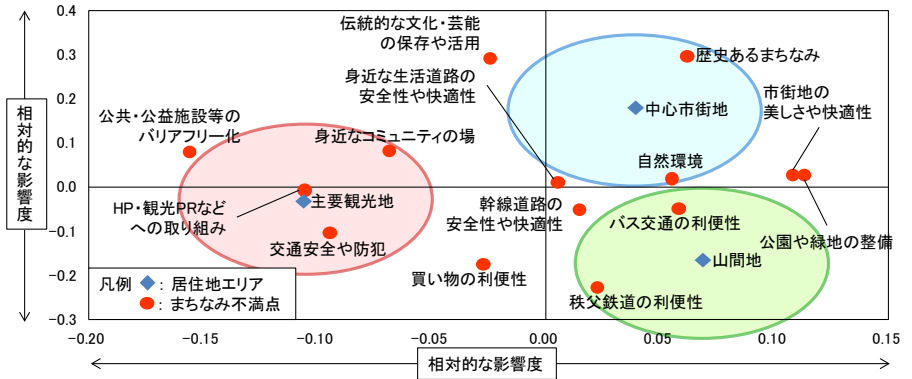


図-6 各居住地のまちなみに関する改善点

4-3 四季における観光資源評価の比較

観光資源評価グラフにおいて観光資源への評価のギャップを視覚的に分かりやすくするためにハートマークの満ち欠けによって表現する。完璧なハートマークは長瀨町住民、来訪者ともに評価されているため重点的な観光資源として推進できる。左側だけのハートマークは長瀨町住民からの評価は高いが来訪者からの評価が少ないため、潜在的な観光資源の価値の可能性があると考えられる。右側だけのハートマークは長瀨町住民からの評価は少ないものの来訪者からの評価が高いため、内部評価の見直し・外部へのPRをさらに強化を行うことができる観光資源である。

「春」の観光資源評価比較について図-7に示す。春の観光資源ではSLパレオエクスプレスの評価が双方から一定の評価があり観光資源として推進していくことができると考えられる。季節の観光資源としてある南北に続く桜並木に関して住民側の評価は高いが、来訪者側の評価が伸びずギャップが生じているため外部へのPRが必要と考えられる。来訪者には該当なしと答えた人が一定数おり、新たな観光資源の発掘が必要と考えられる。

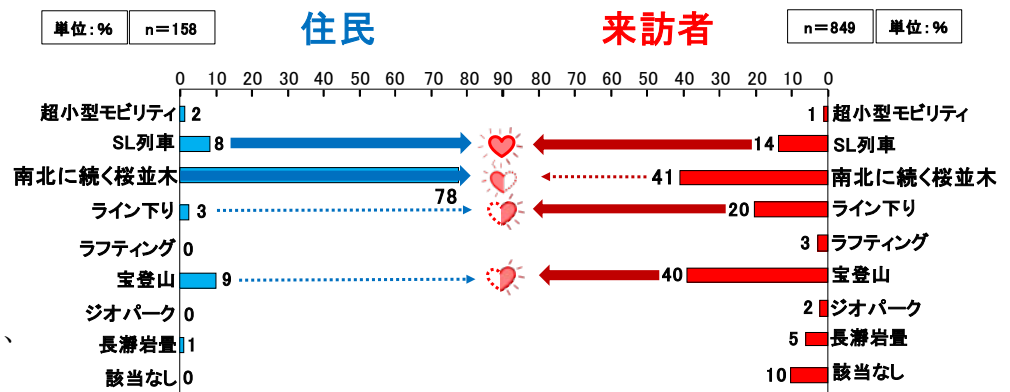


図-7 春の観光資源評価の比較

「夏」の観光資源の評価を図-8に示す。夏の観光資源では、“ライン下り”や“ラフティング”、“かき氷”といった季節性の強い観光資源が、住民と来訪者の双方から一定の評価があり、充実した観光資源なため、夏の主要観光資源として推進していくことができると考えられる。“SL列車”・“宝登山”・“長瀨岩畳”は来訪者の評価が高く住民の評価が低いため、住民側の評価を見直す必要があると考えられる。

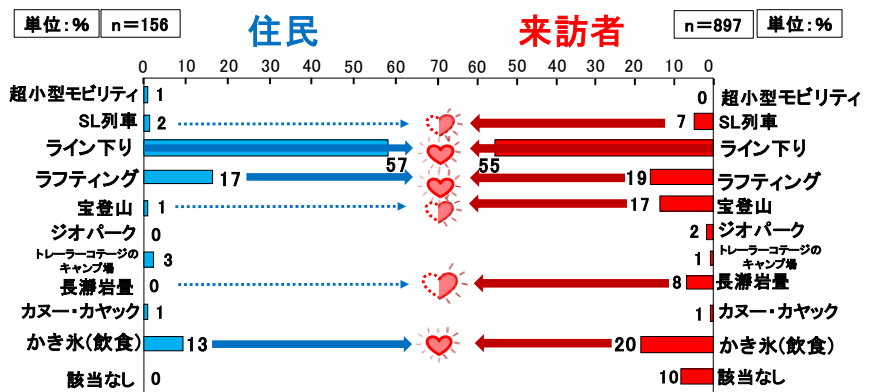


図-8 夏の観光資源評価の比較

「秋」の観光資源の評価を図-9に示す。季節性の強い“月の石もみじ公園”（以降「もみじ公園」と略）は住民の評価は高いが来訪者の評価が低く、今後発展できる観光資源であり来訪者へPRが必要と考えられる。いっぽう、“ライン下り”や宝登山“は来訪者の評価は高いが住民の評価が低いため、住民側の評価を見直す必要があると考えられる。来訪者のもみじ公園に対する評価が低かった要因として、紅葉を觀賞する目的としてもみじ公園ではなく“ライン下り”や“宝登山”へ訪れていると考えられる。

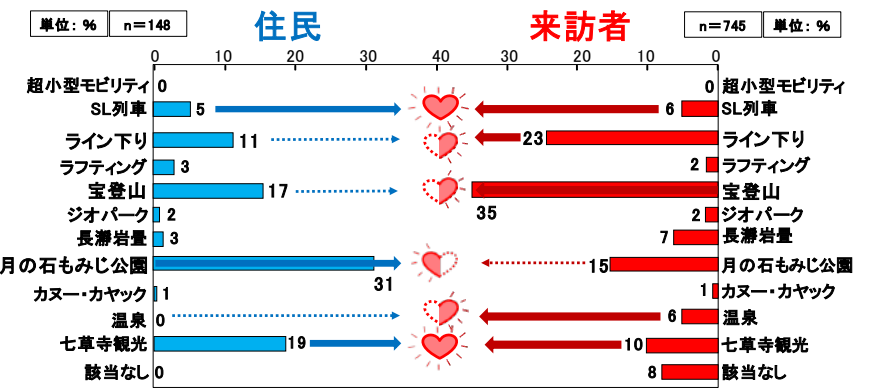


図-9 秋の観光資源評価の比較

「冬」の観光資源の評価を図-10に示す。冬の観光資源では、住民と来訪者の双方から一定の評価がある観光資源が少ないことがわかった。“宝登山”は住民の評価は高いが来訪者の評価が低い。今後発展できる観光資源であり来訪者へPRが必要と考えられる。住民の多くは宝登山のロープウェイや山頂から観賞する宝登山の“ロウバイ園”を評価していると考えられる。いっぽう、“SL列車”や“ライン下り”は来訪者の評価は高いが住民の評価が低い。住民側の評価を見直す必要があると考えられる。

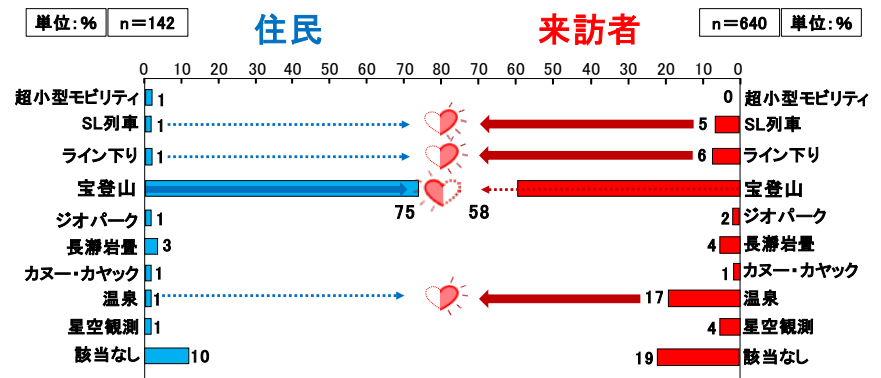


図-10 春の観光資源評価の比較

5 課題

次年度以降の課題は主に2点である。

- ① 住民サイドの協力人材の発掘：今回の活動によって、長瀬町の観光資源の活用方針を明らかにすることができた。一方で、中には観光資源として十分に整備されていないものもあり、これらを活用させていくためには、各資源に精通した住民の協力を得る必要がある。
- ② 観光資源へのアクセス改善：観光に関する各調査を通じて、改めて長瀬町内の限定された移動手段が局所的な観光に影響を与えていることが把握できた。従って、観光資源の活用方針を模索、観光振興体制の形成と並行しつつ、モビリティの改善も必要と考えられる。

6 次年度以降の計画

今回の「ふるさと支援隊」での活動によって、内部評価者と外部評価者双方における長瀬町の観光資源評価のギャップや観光振興に向けた長瀬町の課題を把握することができた。

本研究室では今後、今回の活動で把握された観光資源の種の活性化、地域観光資源の最適化を目的とした「観光バスツアー」の実施に向けて長瀬町と共同で取り組んでいく予定である。本バスツアーでは、長瀬町に点在するまだ認知・評価されていない潜在的観光資源を巡回することによって、アクセスに不便な観光資源への誘致および、主要観光地エリアでのオーバーツーリズムの改善することによって、地域循環観光システムを構築するものである。



【参考】観光バスツアーのプラン案